ロースタリー型障害者雇用支援サービス『BYSN』における ワークサンプルの開発およびEIT研修の実施について

○伊部 臣一朗（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所　研究員）
　刎田 文記　（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所）

1　はじめに

株式会社スタートラインでは企業で働く障害者の就労サポートを行っており、その一形態として珈琲の焙煎業務を行うロースタリー型の障害者雇用支援サービス『BYSN』を新潟県の三条市と提携して運営を開始した。BYSNでの業務は主に、生豆の中からカビの生えた豆や未成熟な豆といった欠点豆を取り除くハンドピック作業やローストした豆から焼きの甘いものを取り除くアフターピック作業、ローストした豆を出荷の形式にそってドリップしたりパック詰めしたりする作業など多種類にわたっており、そのようにして加工した珈琲豆は企業のノベルティや福利厚生として活用できる。

しかし業務内容が多種類であることや、100個近くの生豆の中から欠点豆のみを取り除くといった高度なスキルを求められる作業も含まれていることから、BYSNで働く障害を持ったメンバー間で作業の習得やその後の自立的な業務遂行の度合いに関して個人差が大きく生じることが懸念されている。さらにはそれにより、各企業の管理者や自立的に働けている他のメンバーの負担が増えてしまい、結果としてメンバーや管理者の離職につながってしまうという可能性も考えられるため、障害種別に関わらずメンバーが自立して仕事を遂行していくためのセルフマネージメントスキルの向上を促す支援をBYSNでの定着支援において実施できることが望まれた。

職場において期待されるセルフマネージメントスキルに関しては、「自分で言ったことを行い、行ったことを正確に自己評価し、報告する」というsay-do-say型の言行一致行動が基礎となっていると考えられる[1]。すなわち働いている障害者の職業的自立を促していくために、BYSNの作業においてもsay-do-say型の言行一致訓練に基づいたセルフマネージメントスキルの形成が望まれた。

2　本研究の目的

そのため本研究では、BYSNでの作業の習得および習得した作業を自立的に行うためのセルフマネージメントスキルの向上を目的としたBYSN版ワークサンプル（以下「BYSN-WS」という。）の作成と、それを用いて職業遂行能力を向上させるためのBYSN-EIT研修を実施した。またメンバーが自立的な業務遂行を行えるようになっていくためには、メンバー自身がセルフマネージメントスキルを身に着けるだけでなく、それを支える管理者や支援者といった周囲の環境もセルフマネージメントスキルを理解しその向上を促すことができるようになっている必要がある。そこで本研究においては対象者の自立的な業務遂行能力の向上を促す研修の提供に加えて、管理者や支援者がBYSN-EIT研修を通してより高度な支援技術の向上の習得を促すことも目的とした。

3　BYSN-WSの解説

今回作成したBYSN-WSにおいては、道具や欠点豆の名前と特徴を学習するための(1)見本合わせ課題、段階的に難易度を調節しながら集中訓練で学習するための(2)ワークサンプル、そして実施者のセルフマネージメントスキルを効率的に向上させるための(3)OJT形式の業務訓練といった、大きく３つのステップで実施するよう構成した。

(1) 見本合わせ課題

BYSNの業務では各作業工程で使用する道具の種類やハンドピック作業で取り除く欠点豆の種類等について、それらを正確に弁別するための見本合わせ課題を作成した。作成した見本合わせ課題は刺激等価性のパラダイムを利用して[2]、道具の画像-名前-機能の等価関係を学習するものと、欠点豆の画像-名前-特徴の等価関係を学習するものの２種類を作成した。それぞれの見本合わせ課題はあらかじめ刺激を登録しておいたPC上のシステムを用いて実施できる形式になっており、派生的な関係反応も含めて刺激どうしを関係づける学習が成立しているかを実施者が検証できるようにした。

(2) ワークサンプル

焙煎前の生豆から欠点豆を取り除くハンドピック作業や、焙煎後に焼きの甘い豆を取り除くアフターピック作業など、習得に時間を要する可能性がある作業については、段階的に作業の難易度を調節しながら訓練をすることのできるワークサンプルを作成して、集中訓練形式によって習得を促す形とした。ワークサンプルに関しては支援者用の実施マニュアルの作成と、正確な作業習得のためメンバー自身が作業に関する自己評価を行うためのセルフモニタリングチェックシートを使用して進める訓練形式の設定を行った（図１参照）。

スマートファーム作成手順
様式No：②
通番：1
改訂　2020/05/20

名前：　　日付：
開始時間：　　終了時間：

準備物チェックリスト
天板２枚（４０天板/２４天板）　フィルター１２個　黒布２枚　青カップ６個　白カップ８０個/４８個

		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目
1	正確に作業します	✓									
2	フィルターと黒布を水につける	✓									
3	フィルターをしぼる（固らかし状態にする）	✓									
4	フィルターを詰めます	✓									
5	黒布をしぼる	✓									
6	黒布をトレーに敷きます	✓									
7	青カップを３つ置きます	✓									
8	天板を設置します	✓									
9	自分で正確かを確認します	✓									
10	結果を管理者へ報告します	✓									

図１　セルフモニタリングチェックシート

(3) OJT形式の作業訓練

見本合わせ課題やワークサンプルを用いた訓練によって一連の業務を遂行する上での準備的なスキルを身に着けたのち、OJTによる作業訓練を実施する形式にした。OJTでの訓練においては、各作業の課題分析を行ったうえで工程を細分化し、どの工程につまずきが生じるかが観察しやすいように構造化を行った。それをメンバー用の業務マニュアルにも反映し、１つの作業における各工程の手順と内容を明確に学習できるようにした。

加えてワークサンプルを用いた訓練と同様に、対象者自身が各工程の手順に従って正確に作業できているか自己評価するためのセルフモニタリングチェックシートを用いる形で訓練を進める形式とした。作業の進め方については、say-do-say型のセルフマネージメントスキル訓練に則って、「作業開始の宣言（自己教示）」→「各工程を確認しながらの実施（自己監視）」→「作業結果についての確認（自己評価）」→「管理者への作業結果の報告」という流れで進める形とした。

またBYSN-WSを用いた訓練全体の評価デザインとしては、ワークサンプル幕張版（以下「MWS」という。）と同様にシングルケース研究法に基づいたABAデザインでの評価を取り入れた。これはBYSN-WSにおいても、対象者ごとの障害状況が大きく異なることが予想されたため、個々に有効な方法を探る必要があるためである[3]。各作業の実施状況やその際に用いた補完方法等は、BYSN-WS進捗管理表を用いて記録するようにし、管理者や支援者が対象者の状況を共有して把握できるようにした。

４　BYSN-WSを用いたEIT研修の実施

本研究においてはBYSN-WSの開発のみでなく、BYSN-WSを用いた訓練を通して対象者のセルフマネージメントスキルの向上を図るとともに、彼らをサポートする管理者や支援者の支援技術向上も目的としている。そのためBYSN-WSの開発後、それを用いたEIT（Employability Improvement Training）研修の実施までを本研究内容に含むものとした。EIT研修ではセルフマネージメント・トレーニング・マトリックス[1]（図２参照）に基づいて対象者のセルフマネージメント段階を把握しながら、業務における正確性の獲得から自立的な業務遂行および休憩取得へとセルフマネージメントスキルを効率的に向上させていくための支援を実施する構造になっており、管理者や支援者にとってもそうした支援を体験的に学べる場となるように設計した。そのため、セルフマネージメントスキルの段階的な向上のための支援について説明する資料を作成し、管理者や支援者には事前に資料を用いた研修を実施した。さらに管理者については、支援に関わる基礎知識等に関しての専用のマニュアルを作成して、管理者研修もEIT研修と並行して実施した。

今回の発表では、BYSN-WSを使用したEIT研修の結果も合わせて報告する。

後続条件／生活を支える休憩や余暇を楽しむ能力の育成レベル	協議による統制				（4）
	自発的行動による統制			（3）	
	選択肢選択による統制		（2）		
	他者の強化による統制	（1）			
		他者の指示による統制	選択肢選択による統制	自発的行動による統制	協議による統制
		先行条件／社会の一員として他者に役立つ能力の育成レベル			

図２　セルフマネージメントスキル・トレーニング・マトリックス

【参考文献】

1) 障害者職業総合センター(2003)調査研究報告書No.55多様な発達障害を有する者への職場適応及び就業支援技法に関する研究

2) 山本淳一(1994)刺激等価性：言語機能・認知機能の行動分析行動分析学研究 7 (1), 1-39, 1994　一般社団法人 日本行動分析学会

3) 障害者職業総合センター(2004)調査研究報告書No.57精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)